

# 藝園草牧

夕張郡長沼町字幌内一〇六六  
雪印種苗株式会社  
中央研究農場

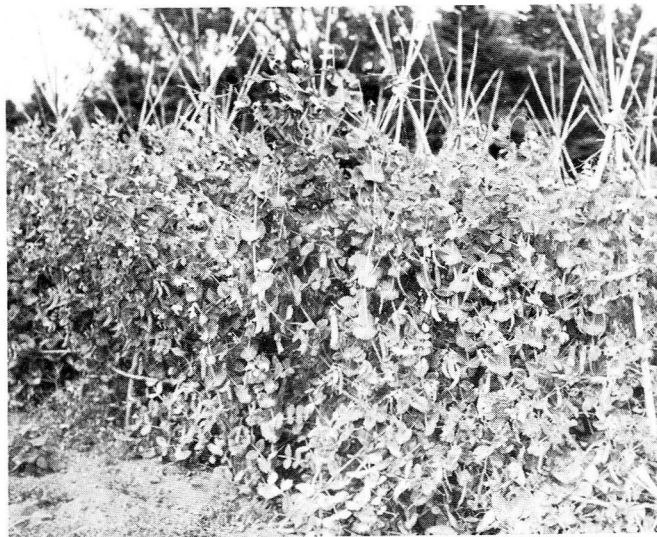


# エンドウの作型と品種

## 作 型

エンドウは周年供給されているが、5～7月に出荷量が多い。エンドウは栄養価が高く需要が平均しており、生産量の少ない秋から冬にかけて価格が高い。

エンドウはわりあい低温に強く、稚苗時なら-4～5℃まで耐えるといわれるが、5℃以下では開花結実が不良となる。また高温にも弱く25℃位になると生育を停止する。エンドウの栽培型は夏播栽培、秋播栽培、春播栽培に大別される。



夏播栽培は暖地の無霜地帯で行なわれている栽培型で、7月下旬～9月下旬に播種される。播種時期に高温乾燥のため播種できない場合があり育苗して定植することも行なわれる。また早くから収穫するために低温処理（催芽種子を1～3℃の温度に15～20日間冷蔵）によって着花節位を低めることができる。降雪地帯、都市近郊で11月頃から収穫するためトンネルを利用することもある。この場合早くからビニールをかけると伸びすぎるので換気に注意する。

秋播栽培は東北以南の越冬可能な地帯で行なわれている。どの程度の苗の大きさが越冬に好都合かということとは地帯、品種によっても違うが、無積雪地帯では、5～7cmくらいに伸び、3～4本分枝した頃が良いといわれる。この程度で越冬させるよう播種期を調節す

ることが大切である。10～11月が播種適期とされ、播種期をおくらすと越冬率は高くなるが、翌春の収穫がおくれる。

春播栽培は高冷地、東北、北海道で行なわれている栽培型で、早春融雪早々に播種する。

## 品 種

莢用種は三十日絹莢、電光、矮性種の鈴成砂糖などが多く使われている。これらは耐寒性劣り、鈴成を除いて分枝数も少ないので越冬播にはやや密植した方がよい。伊豆赤花は莢は小さいが越冬性がすぐれている。子実がある程度太っても莢のやわらかい品種が、収穫にも幅をもたせることになり要求されている。さらに莢の小さい品種より大莢の仏国、米国などが好まれる傾向がある。

実用種（むき実用）は粒が大きく、色が濃く、糖分の多い品種が要求されている。現在多く使われている品種としては、アラスカ、目黒、白竜、札幌青手無などである。東北などでは莢用種の莢を充実させて、むき実として利用されることも多い。

エンドウの作型と品種

作 型	地 帯	播種期	収穫期	品 種
夏播栽培	暖 地	7月 ～ 9	10月 ～ 5	(莢)日本絹莢、伊豆赤花 (実)ウスイ、アラスカ、目黒、オランダ
秋播栽培	関東、東北	10月 ～ 11	5月 ～ 6	(莢)三十日、電光、四十日鈴成、仏国 (実)ウスイ、目黒、アラスカ、白竜
春播栽培	東北、北海道 高冷地	4月 ～ 5	7月 ～ 8	(莢)三十日、電光、四十日鈴成、仏国、米国 (実)目黒、青手無